

フランケ『自伝』より (1690/91年)
August Hermann Franckes Lebenslauf.

菱刈 晃夫

ここに掲載するのは、前号で紹介した、アウグスト・ヘルマン・フランケ (August Hermann Francke, 1663-1727) の回心体験を含む、自身の手による伝記である。フランケが、実践する神学、すなわち教育実践へと本格的に歩を進める開始点が、生々しく描きだされている。詳しくは、今年出版予定の『フランケ「回心の開始と継続」』菱刈晃夫訳、ヨベル出版、2024年、『ドイツ敬虔主義著作集』第4巻、を参照されたい。

*

私のキリスト教信仰に関する限り、特にライプツィヒでの最初の数年間は、それはとてもひどく生ぬるいものであった。私の望みは、高名で学識ある人物になることであった。富を得てよい毎日を送ることができたなら、それも私には不快ではなかったであろう。もっとも私は、そのようなことを目指しているように見られたくはなかったが。私の心が吠える声は空しく、まだ手にしていない未来のものに向けられていた。私の関心は、人々からますます気に入られることにあった。天の神のために生きることよりも、世の人々からもっと気に入られるように努力していた。さらに外的にも私は、ぜいたくな衣服やその他の虚栄の中で、この世と同じところに並んでいた。つまり私は内的にも外的にもこの世の人間〔世俗人〕だったのであり、自分の悪は減るどころか、逆に増えていった。知識は増えていったが、それゆえにますます尊大になっていった。このとき、私は神に自分のことを訴える理由は何も持たなかった。というのも、すでに神は私の良心をしばしば力強く揺さぶるのを決してやめなかったからであり、私をその言葉によって悔い改めへと呼ばれていたからである。私は正しい状況にはないということを十分に確信していたのだ。私もしばしばひざまずいて、神に改善を誓った。しかし結果は、単に一過性の熱気でしかなかったことを証明した。私は人々の前で自分を十分に自己正当化しているのを分かっていた。が、主は私の心をご存じであった。私は確かに大きな不安と悲慘の中にあった。しかし、それでも神にそうした不安の原因を告白し、そして神にのみ真の平和を求めらるる栄誉を、神に帰すことをしなかった。私は自分の行動が依拠する、そうしたこの世の原理の中で安らうことはできないのを十分に知ってはいたが、それでも墮落した本性によってさらに麻痺させられてしまっており、悔い改めは一日一日と先延ばしにされたのである。

24年の間、私は実のならない樹木以外の何物でもなかったと言わざるを得ない。それには多くの葉が茂っているものの、多くの腐った実もならせていたのである。しかしそうした状況の中で、私の人生にとって世の中はとても気に入ったものとなり、私たちは互いに仲良くやることができたし、こうして私はこの世〔俗世〕を愛し、この世も私を愛したのであった。ゆえに私は迫害からは逃れていた。というのも私は敬虔な人々の間では見かけは敬虔であり、悪人の間では実のところ悪人であり、風に従ってマントをかけて装うことを学んだからである。こうして人が、そこで真実〔真理〕をめぐる私と敵対するようなことはなかった。なぜなら私は人々と敵対しようとしなかったし、先のように私は生きていたので、彼らもまた本当に真剣には語れなかったのである。ところが、この世とのそうした平和は私の心に安らぎをもたらしはしなかった。それどころか将来への心配、名誉心、すべてを知ろうとする欲望、人々の好意や友情を求めること、そしてその他この世への愛から溢れでる悪徳、とりわけ私は正しい状態にはないという、常に密かに蝕む疾しい良心という虫 (wurm eines bösen Gewissens) は、猛烈に荒れる海のように、私の心があるときはこちら側へ、そしてあるときはあちら側へと駆り立てたのだ。それでも私は外的には

しばしば他者よりも喜んでるように装っていたので、そうしたことは〔他人には〕ほとんど隠されていた。こうした状態の中で私はライブツイヒでのほとんどの時間を過ごした。1687年まで私は、まさに真剣かつ根本的に自己を改善しようとする企てを思い出せないでいる。

しかし24歳ごろ私は自己に転じ始め、自身の悲惨な状況を深く認識し始め、非常に熱心に、私の魂がそこから解放されるようになることを切望し始めた。何が私に最初にそうした機会を与えたのかを言うとするなら、私は常にあらかじめの神の恩恵の他には知るよしもなく、外的には私の神学研究以外には確かなものは何も示すことができない。それ〔神学〕を私は、ただの知識として、単なる理性で理解していた。こうして私は、なおも公の場所にいるとしても、私自身が、自分の心の中で確信していないことで人々を欺くことはできない、と信じていた。私はなおもこの世の社会の只中〔世俗〕に生きていて、罪への誘惑と共にあって、そうした状態にますますのめり込んでいた。長い習慣がそうさせたのだ。ところが、こうしたすべてのことにもかかわらず私の心は、至高の神によってその神の前に逐り、恩恵を請い願ひ、何度もひざまずいて嘆願するよう、揺り動かされた。こうして神は私を異なる生活の在り方に置き、神の誠実な子にしようと欲したのである。私の場合、ヘブライ人への手紙5章12節の言葉がぴったりである。「あなたがたは、長らく教師をしながら、神の言葉の初歩をもう一度誰かに教えてもらわねばならず、また、固い食物ではなく、乳を必要とする始末だからです」。というのも私は神学をおよそ7年間学び、私たちの提題が何であり、いかにそれを主張し、それに対して反対者が何を言ったかを知り、聖書を何度も繰り返し読んだし、なるほど他の実践的な書物に欠くこともなかったが、しかしこれらはすべて私の理性と思考の中だけで捉えられ、神の言葉は私の身において生命〔生活・人生〕に変わることはなく、それどころか私は神の言葉の生きた種子を望みさせ、実りのないものにしていただけなのだ。こうして私はいまや言ってみれば、新たにキリスト者となるための第一歩を踏み出さなければならなかったのである。しかし私はそこで私の状態が身動きできないものになっていることが分かった。この世の数々の障碍や妨害に囲まれていたのである。こうして私は深い泥沼にはまり込んだ者のようであった。いわば腕を前に伸ばすのだが、力なく傷つくだけなのである。あるいは手と足は枷と鎖で、さらに全身もつながれていて、綱をずたずたにしていた。しかし心では解放されたい〔自由になりたい〕と切望していた。

しかし信頼する真実の神は、その恵みと共にいつも私のところに来て、日に日に神を喜ばせるように、生きる準備をしてくれていた。神はすぐにその強力な御手でもっとも困難な外的障碍を取り除かれた。こうして私は思いがけなく救われたのだ。と同時に、神は私の心を変えられたので、私はより熱心に神に仕える機会をむさぼるようにつかみ取った。その状況は、私が薄暗がりの中にいて、まるで目の前に薄もやがかかっているかのようにであった。私は聖堂の入り口に足を置くのだが、それでも非常に深く根を張ったこの世への愛に引き留められ、完全に中へと進むことはできなかった。私の心の中の確信はとても大きなものであったが、その古い習慣〔生き方・在り方〕は、いろいろと軽率な言葉や行動をもたらし、そのためとても不安であった。その際、それでも私の心の中には根柢があって、敬虔さをつとに愛し、間違いなく誠実にそれについて語り、よき友人に対しても、私の関心が今後は神に栄光があるような生活することである、と明言していた。こうして私もある者たちからは熱心なキリスト者と見なされ、よき友人たちは後に、すでにそうした時期に、私に目ぼしい変化があるのを感じていた、と告白した。しかし私は内心よく分かっていた。主である神を知らないことを。つまり当時もこの世の考え〔俗世〕がまだ私には優勢であって、その悪は私の中で巨人よりも強力であり、それに対して私は、いわば子どものように逆らっていただけなのだ。

そうした状態にある私より惨めな者とは、いったい誰だろうか。なぜなら私は一方の手で天を、他方の手で地上をつかんでいるのだから。神と俗世の友情を同時に享受しようとしているのだから。あるいは、すぐに一方と、またすぐに他方と相争っているのだから。こうして、どちらも正しく保てないのだから。ところがイエス・キリストの中に神が人類に示された神の愛が、いかに大きなものか！神は、私がいまも込んでいた深い墮落のゆえに、私を投げ捨てることはなかった。そうではなく、このような私に寛大であり、私の弱さを改めてくれた。こうして私は、それでも勇気をなくすことごとくなく、それどころか神から来る、

真実の生命を得ることができるだろう、と常に希望を抱いてゆけたのだった。人は神に苦情を申し立てる理由などないということ。神のことを誠実に思い、その御顔を真摯に求める心のあるところで、すでに神は扉と門を開けてくださっているのだ、ということをおはまさに経験した。神はいつも私の前を行かれ、丸太や困難を道から取り除いてくれた。こうして私は、わが回心が私によるものではなく、神の御業であることを確信させられることになった。と同時に、神は私の手を取り、私をまるで母親が弱い子どもを導くように私を導いてくれた。そして神の愛はとても大きく熱狂的であり、私がお手から離れると、神は再び私をとらえ、その懲罰の鞭が私に感じられるようにしてくれるのであった。

そしてついに神は、私を自由でとらわれのない状態に置いて、また私の祈りを聞き入れてくれた。私は俗世とは何も、あるいは非常にわずかしら関わらなかったもので、それでもそこでキリスト教信仰の外的な障碍や妨害のことを嘆くなら、それは大間違いということになろう。というのも神は、私がいつもあれこれと障碍にとらわれたままであるライブツィヒを去らなければならないようにしてくれたからである。つまり神は私の叔父であるグロキシン博士の心を導いて、私にシャッベル奨学金を再び与えるようにしてくれたのである。彼は私がすべてのことを差し置いて聖書解釈学の勉強を追究するように求め、そのためリュネブルクに行くように命じた。そこで当時リュネブルクの教区監督で、今はホルスタインの管区総監督である、ヘルマン・ザントハーゲン〔Caspar Hermann Sandhagen, 1639-1697. 聖書解釈学の著名な神学者〕からの教示に頼るように言われたのだ。私は1687年の秋に旅立った。喜びはますます大きくなっていった。というのも、そうした道を通じて私は自分の主たる目的、すなわち誠実なキリスト者になることを、より完全に達成できると確信していたからである。ここで今や外的な障碍は、愛する神によって一挙に取り除かれた。私は自分だけの小部屋を得た。そこで私は邪魔されることなく、あるいは誰かも思索を乱されることなく、キリスト教的で敬虔な人々の家で食事をとった。

私は来たばかりであった。そこで私はヨハネ教会で説教をするようにと声をかけられた。そして説教が行われるまでにはかなり時間があつた。しかし今やすでに私の心は、単なる説教の練習ではなく、特に聴衆を敬虔な気持ちにさせることを目標にしていた。そうしたことを私が考えていると、次のような章句と出会った。「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じて、イエスの名によって命を得るためである」(ヨハ20・31)。この章句によって私は、真の生きた信仰について取り扱い、単なる人間の、空想がつくりだした妄信とそれがどのように区別されるのか、ということについて語る特別の機会にしたいと考えた。こうして、そうしたことについて懸命に考えさせられたことで、私は説教の中で求められるような、それにふさわしい信仰を私自身が自分に見いだせないという心情に至ったのだった。ゆえに私は説教について黙考することから離れ、ひたすら自分自身のことに関わらなければならなくなったのである。というのもそうしたこと、すなわち私が真の信仰をまだ持っていないことは、ますます深く私の心をかき乱したからである。私は何とか自分を元気づけようとし、すぐに悲痛な考えを追い払おうとしたが、しかしそれは何のたしにもならなかった。

私はこれまで自分の理性を、十分な根拠をあげて納得させるということだけには慣れ長けていた。なぜなら私は心の中での霊の新しい活動について、ほとんど経験がなかったからである。ゆえに私はまたもやそうした方法によって自分を助けようと思ったが、しかしそうしようとすればするほど、より深く私は不安と疑念の中に陥るのであった。私はヨハンネス・ムセウス〔Johannes Musäus, 1613-1681. イエナ大学神学部教授〕の書物〔Collegium Systematicum〕を手にとった。それはこれまで私が他の人々に紹介してきたものであるが、今度はそれを私が再び脇へ置かなければならず、ここにすがれるものは何もなかった。私は聖書にまた頼ろうと思ったが、聖書が神の言葉であるかどうか誰が知っているのか、という考えがすぐに浮かんできた。トルコ人はコーランを神の言葉と、ユダヤ人はタルムードを神の言葉と称するが、いったい誰が正しいと言えるのであろうか。こういう思いがますます優勢になり、最終的には私が一生を通じて学んできたすべて、特に過去8年間の神学の研究から、神と神の啓示された意志や存在について、心から信じていたものは何一つ残っていないことに気づいたのであった。なぜなら私は天にいる神を信じておらず、

それによって私は神の言葉にも人間の言葉にも頼ることができなくなり、そのどちらにも、当時は力を見いだせなかったからである。神の真実を軽視する世俗的な心からではない。いや、むしろ私はすべてを信じたいと願っていた。が、それができなかったのだ。私はさまざまな方法で何とかしようとしたが、何もかもうまくいかなかった。

だがその間、神は私の良心に沈黙しなかった。私は神を実際に拒絶していたにもかかわらず、私の目の前には、私の心の中の、過去の私の生活全体が、まるで高い塔から町全体を見下ろすかのように見えてきたのである。最初は罪を数えることができたが、やがてその主たる源、すなわち不信仰あるいは妄信が明らかになり、私自身が長い間自分自身を欺いていたことが分かり始めた。そのとき私の全生涯と、私が行ったこと、言ったこと、考えたことのすべてが、神にとって罪として、大きな忌まわしいこととして差し出された。心はひどく不安になり、そこで神を敵にした。神のことを、私の心は何としても否認し、信じるができなかった。この苦しみは多くの涙を私の目から流させたが、しかしそれは私のふだんの性格とは似合わない。が、ときにはある場所に座って泣き、あるときにはときおり大きく不機嫌になり、またときにはひざまずいて、自分が知りもしない存在を呼び求めた。もし本当に神が存在するなら、どうか私を憐れんでください、と心の中で叫んだのである。そういうことを私はしばしば何度も繰り返した。しかし人々と一緒にいるときは、できる限り内面の苦しみを悟られないようにした。

私は食事を終えた後、一度だけ、近くに住んでいる教区監督のところ、私の家の主人と一緒に行くことになった。そして彼も同意した。その間、私は立ってギリシャ語の新約聖書を手に取り、中で読もうとした。私がそれを開いたとき、主人は言った。「うん、これは大きな宝物だね」。私は周りを見回して彼に、私はどこを開いたか分かるか、と尋ねた。彼は「いいえ」と答えた。それで私はこう言った。「私たちは、この宝を土の器に納めています」(二コリ4・7)云々。彼がそれを言った瞬間、私にはそのような言葉がすぐに目に入ったのだ。これは私の心を少しばかり痛めた。そして、おそらくそれは偶然のできごとではあるまいと考えた。それでも、まるで隠された慰めが私の心の中に入り込んだような気がした。しかし私の無神論的思考はすぐに腐敗した理性を用い、神の言葉の力を再び心から引きはがしてしまった。私は主人と一緒に先ほどの道を進み、そして先に述べた教区監督者の家に到着した。監督者は私たちを居間に案内し、座らせてくれた。私たちが腰を下ろすやいなや教区監督者は、信仰を持っているかどうかを人はどのように認識するか、と話し始めた。この質問について彼らの間で異なる意見が出たが、それらの議論は信仰を持っている人々をさらに力づけるものであった。しかし私はそこに座って、最初は驚き、そして彼らが私にとって極めて重要な議論に偶然にも進んでいるのでは、と考え始めた。というのも私の状況については誰も、実際には全く何も知らなかったからである。私も彼らに熱心に耳を傾けたが、それによって心が安まることはなかった。むしろ私は、彼らが聖書の基本から引用した信仰のしるしとは全く逆のものを自分自身に認識したため、私は信仰を持っていない、とますます確信した。私たちは別れを告げ、私が主人と一緒に町に戻る途中、私は彼に心情を打ち明けた。私は言った。「もし彼が、私がどのような状態にあるかを知っていたら、彼は自分たちがどのようにして、あのような議論に至ったのか不思議に思うだろう」と。彼は「どのような状態か」と尋ねたので、私は「私には信仰はありません」と答えた。彼は驚き、私を元気づけようとする方法を試みた。しかし、私は自分の理性を総動員して反論し、最終的に結論として言った。「あなたが言ったことはあなたを力づけることができるだろうが、私には何の役に立たない。今は、言ったことを自分の心の中だけに留めておけばよかったと思う」と。

その間、私は以前の行動を続け、自分自身の心を最大限に抑えつけながら、熱心に祈りを捧げた。翌日は日曜日だが、私は前日と同じ不安の中で床に入った。また、もし何も変わらなければ、私は説教を辞退しようと思っていた。というのも私は信仰を持っておらず、また自分自身の心に逆らって説教を行うことはできないし、それは人々を欺くことにもなるからである。また、それは私には不可能であったと思う。私は非常につらいと感じた。神を持たないこと、心が拠り所とする神を持たないこと、罪を嘆くこと、その理由や罪を赦す神が本当に存在するのかわからないこと、日々の苦しみや悲しみを見ても、救い主も隠

れ家もないのを感じたのだった。そうした大きな不安の中で、私は再びその日曜日の夜にひざまずき、まだ知らないし信じてもない神に助けを求めた。もしそのとおりに神が存在するなら、この苦しみから救ってくれるように、と。が、そのとき、私がまだひざまずいているうちに、生ける神、主は私の祈りに答え、その聖なる玉座から私の言うことを聞いてくれたのである。父なる愛はとてつもなく偉大で、神は私の心の疑念と不安を徐々に取り去るのではなく、ますます私を確信させ、私の迷った理性がその力と誠実に反対する理由がないことを示すため、突如として私に答えたのだった。というのも私の疑念は、まるで手のひらをひっくり返すように一瞬で消え去り、私はキリスト・イエスにおける神の恩恵に心からの確信を得たのである。私は神を単に神でなく、自分の父と呼べるようになっていた。すると、すべての悲しみと不安が一瞬にして取り除かれ、代わりに喜びの流れであふれるようになった。私は力強く神を賛美し、私にそうした大きな恩恵を示してくれた神を称えた。私は床についたときは全く異なる心境で立ち上がった。私は大きな悲しみと疑念の中でひざまずいたのだが、今は言葉にできないほどの喜びと確信を持って立ち上がったのだ。寝る前には神が存在するとは信じていなかったが、起きてみれば恐怖も疑念もなしに、自分の命をかけてそれを確認することができるほどの確信を得ていた。その後も床に入った。が、喜びが大きすぎて眠れない。少し目を閉じてもすぐに目が覚め、私の魂に自分を示してくれた生ける神を再び賛美して称えた。私はまるで一生を深い眠りの中で過ごしていたかのようで、すべてが夢の中で行われていたかのように感じられ、今やっと目を覚ましたかのようであった。私には、自然な人間の生活と神から来る生命との間にどのような違いがあるのか、もう誰かに説明される必要はなかった。今まで私は、まるで死んでいたかのように疲れ果てていた。しかし見よ、私は生き返ったのである。私は寝床で一晩、過ごすことができなかった。そこから喜びと共に飛び出し、私の神、主を賛美した。実際、神を賛美するだけでは足りないと感じた。私はすべてのものが主の御名を賛美することを望んだ。「天の使徒たちよ、私と共に主の名を賛美しよう。主は私にそのような憐れみを示してくれた」、と私は叫んだ。私の理性は今やまるで遠くに立っているかのようで、勝利はそこから奪われてしまっていた。なぜなら、神の力が理性を信仰に服従させたからである。しかしときおり、理性は私に考えさせた。これは自然のものではないか、自然からもこのような大きな喜びを感じることができるのではないか、と。しかし私は断固としてそれに反対し、すべての世界があらゆる喜びと栄光をもってしても、このような喜びを人の心に起こすことはできないという確信を得ていた。そして神の恩恵と善意の先触れの後、世界の誘惑は私にとってほとんど意味を持たなくなることを信じていた。生ける水の流れは私にとってあまりにも魅力的になっていた。だから、この世界の汚れた水たまりを簡単に忘れることができたのである。神がその弱い子どもたちを養うために与えるこの最初のミルクは、私にとってどれほど愛らしいものだったことか。それから詩篇36編からの言葉が鳴り響いた。「神よ、あなたの慈しみはなんと貴いことでしょう。人の子らはあなたの翼の陰に逃れます。彼らはあなたの家の豊かさによって満ち足り、あなたの喜びの川に渴きを癒します。命の水はあなたのもとにあり、あなたの光によって、私たちは光を見ます」(詩36・8-10)。今や、私はルターがローマ人への手紙の序文で述べたことが何を意味するのかを理解した。信仰は私たちの中での神のわざであり、それは私たちを変えて神から新しく生まれさせるものである。ヨハネによる福音書1章12節、また古いアダムを殺し、私たちを心、意志、考えから、すべての力をもって全く新しい人間に変え、聖霊をもたらすもの云々と説明されている。信仰は、神の恩恵に対する生きた、確信に満ちた信頼である。この信仰は、千回死んでも確信が揺るがないほど確かなものである。そしてこの確信と神の恩恵の認識は、信仰において聖霊が行うものであり、それによって人は神とすべての創造物に対して喜びに満ちて、堂々と、そして陽気になる云々。神は私の心を、神に向かう愛で満たした。それは神がご自身を、最高かつ計り知れないほどの宝物として私に示したためである。そのため次の日には私の以前の悲惨な状態を知っていた主人に、この救済について涙なしでは語れなかったほどである。彼は私と一緒に喜んだ。その翌週の水曜日、私は課せられた説教を喜んで行った。私はヨハネによる福音書の20章21節に基づいて、真の神の確信から来るものとして行った。私は正直に言える。コリントの信徒への手紙二の4章にあるように、「私は信じた。それゆえに語った」と書いてあるとおり、

それと同じ信仰の霊を持っているので、私たちも信じ、それゆえに語ってもいるのです」(二コリ4・13)。

これが私の実際の回心の時期である。このときから私のキリスト教信仰は〔不動となり今まで〕継続してきた。それ以降、神意に適わないものや世俗的な欲望を捨てて、この世で慎み深く、正しく、敬虔に神に従うことが私にとって容易になった(テト2・12参照)。私は神に忠実に従い、地位、名誉、富、豊かな日々、外的で世俗的な楽しみを価値とは見なさなくなった。以前は学識から偶像をつくりあげていたが、今では信仰が芥子のたね一粒と同様、百の袋いっぱい詰まった学識に勝ると気づき、ガマリエルの足元で学んだすべての知識が(使22・3参照)、私たちの主イエス・キリストのとてつもなく豊かな知識と比較して、ほとんどが屑であって価値がないことを理解した(フィリ3・8参照)。それ以降、私はこの世が何であり、この世の人々が神の子らとどのように異なるか、初めて認識した。というのも、この世もすぐに私を嫌悪し始め、私に敵意を抱くようになり、私の行動に不快感を示し、文句を言ったり、言葉で攻撃したりしたからである。真剣なキリスト教徒であることを、私は彼らが考える以上に主張しているというのである。しかし私はここでも神の大いなる誠実と知恵を称賛しなければならない。神は弱い子どもが度を過ぎた食べ物によって、柔らかな植物が荒れた風によって破壊されるのを許さない。むしろ神はもっともよくご存じである。いつ、どれだけの程度でその子どもたちに何かを課すべきかをご存じなのである。それによって彼らの信仰を試し、浄化するのだ。したがって私は試練に事欠くことはなかったが、神は私の弱さをいつも優しく取り扱い、ますます大きな苦しみを少しずつ私に分け与えてくれた。しかし神から授かった神の力に従って、増大する痛みや大きな試練を、最初の小さな試練よりも、こうして私はますます容易に耐えることができたのであった。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP 22K00110 の助成を受けたものです。